

地図リテラシーを身に付ける高等学校「地理総合」の単元開発

～「地図リテラシー」の再検討～

42325015 山崎彩花

1. はじめに

富山県総合教育センターの科学情報部では、「授業における ICT 活用に関する調査研究-学習場面に応じて1人1台端末の活用を中心として-」という主題・副題で今年度の調査研究を進めてきた。調査研究協力校における授業実践に協力させていただき、協働学習が主体的・対話的で深い学びを目指す上で有効であることを理解した。生徒の発表場面では自身が作成した作品を説明していたが、聞き手の生徒は、意見や疑問点を述べることは少なく肯定的で簡素な感想を述べる様子が見受けられた。生徒同士が表現や発表をするという協働的な場面において、論理的な意見を交換することができる授業構造が課題だと考えた。

2. 研究の背景

新学習指導要領では、「個別の知識や技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」といった資質・能力を育成するための「教科・科目」の中に、「地理総合」が位置づいている。従来の高等学校における地理教育は知識理解に重点が置かれてきた。地理歴史科高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説によると、従来の学習の課題として「課題を追究したり解決したりする活動を取り入れた授業が十分に行われていない」（p.6）を取り上げ、対する策として「知識や思考力等を基盤として（中略）持続可能な社会づくりの観点から地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとす

る態度」（p.6）などの育成を求めている。特に知識及び技能については、「単に理解しているか、できるだけでなく、それらを生きて働かせてどう使うか」（p.8）という点が強く主張されている。「知識理解」から「知識活用・課題解決」的な学習がより重要視されるようになっている。

3. 地図リテラシーとは

リテラシー(literacy)の日本語訳は明確に定義づけられていない。Oxford English Dictionaryによると、公教育を通して子どもたちに共通に育成される読み書き能力として使われ始めた言葉であるという。原義では読み書き能力だが、日本でリテラシーという言葉が使われるようになってからは物事を適切に理解、分析し、改めて記述・表現できることや、情報を活用する能力、また情報を応用する能力などといったニュアンスで捉えられるようになった。ここでは日本語で表現しきれないため、「リテラシー」と表現したい。

日本で最初に使われた「地図リテラシー」は太田(1988)の「地図を読み書きする能力」として用いられたことが原点だと考えられている。地図はコミュニケーション手段だと述べており、従来の読図中心の地図学習から作成中心の地図学習への転換を促している。今日では誰もが自由に地図を作成・発信でき、国土地理院の地理院地図(電子国土Web)や Google Earth のレイヤー機能など作成ツールは多岐にわたる。しかし適切な

読解方法を把握していなければ、不適切な情報の受信をしたり、さらにその情報を誤用し発信する懸念がある。実際に、マーク・モンモニア(1995)は「ひとつの地域についてのデータからは何種類もの地図が作成可能である。1枚の地図は、そのなかのたったひとつにすぎない。」と述べており、地図が常に作成者の主張に偏っていたり混乱を生じる誤用がされていたりすることを指摘している。また、地図表現の恣意性を踏まえてメディアとしての地図を活用するには、読み手にある程度のメディアリテラシーが求められることを強調している。

菅谷(2000)はメディアリテラシーを「メディアの特性や社会的な意味を理解し、メディアが送り出す情報を「構成されたもの」として建設的に「批判」するとともに、自らの考えなどをメディアを使って表現し、社会に向けて効果的にコミュニケーションをはかることでメディア社会と積極的に付き合うための総合的な能力」と定義している。地図に表現されている情報を受け手として批判的に読み取り、表現・発信する際に第三者へ伝わりやすい表現方法・発信方法を活用していくことが地図に対するメディアリテラシーではないかと考えられる。

地図リテラシーとメディアリテラシーの両者の関係について、若林(2021)は地図リテラシーがメディアリテラシーと関連する要素を含んでいるが、それらに包括されるわけではなく、かといって独立なものとして扱うべきものでもないと述べている。また、地図の解釈の深さやその妥当性を左右する重要な要素は、利用者の側でのメディアリテラシーであるとも述べている。これは地図の制作過程を理解・想像し、地図上の描かれていない地理情報に思いをめぐらすこと

を指している。若林はこれを「地図の行間を読む」能力としている。主題図では主題が同じでも縮尺、図法、色彩が異なることで読み手が受け取る印象が異なる。地図に込められたメッセージ性を地図の読者が批判的に読み解こうとする姿勢も地図をメディアとしてみた際のメディアリテラシーではないかと考えられる。

以上のことから本研究では地図リテラシーを「地図が持つ恣意性を理解して批判的に地図を読み解き、適切に用途に合わせて適切に地図表現ができる力」と定義したい。

4. 研究計画

- ・～4月 授業モデルの構築
- ・～9月 実施調査と生徒への導入
- ・～11月 効果の分析(質的調査を検討)

【参考文献】

- 地理歴史編高等学校学習指導要領(平成30年告示) 解説 pp. 35-38,44-45,50
- 太田弘(1988)ニューメディア時代の地図教育-「地図リテラシー」を育てる地図教育の必要-、地図 26(1),p.10-24
- 若林芳樹(2021)「情報化社会における地図リテラシーと空間的思考」立命館地理学,第33号,p6
- 菅谷明子(2000)「メディア・リテラシー-世界の現場から-」岩波新書,pp.25-30
- マーク・モンモニア著,渡辺潤訳(1995)「地図は嘘つきである」,晶文社,p.10
- 若林 芳樹(2008)「地図のリテラシーと主題図の読図-『地図で見る日本の女性』の読み方-」日本地図学会,46 巻,2 号 ,p.24-27